中国残留邦人をご存じですか？

「中国残留邦人」について皆様に知っていただこうと、広報ちくじょう平成24年12月号で、築上町上別府にお住まいの高橋マス子さんの手記（抜粋）をご紹介させていただきました。

誌面の都合上、一部しか掲載できていなかったので、平成25年2月号の広報から3回に分けて掲載しています（不定期）。今回は第2回目です。

問い合わせ　福祉課　社会福祉係（内線２４３）

十五歳、戦乱の中国に一人残されて②

奉天、上海、漢口と経て、一ヵ月以上の長旅の末、でこぼこの山道を七時間も一輪車に揺られて小さな一軒家に着きました。そこには彼が国民軍に入る前の妻と子供二人がいたのです。彼と先妻が喧嘩を始め、先妻は私と撫生を箒や棒で叩きます。私は大人だから我慢しますが撫生の顔や体が真っ青になって腫れているのを見ると、何とも我慢ができなくなって叫びました。「私も好きでこんな山奥に来たのじゃない。主人に騙されてきたのに、何故こんなに叩かれなくちゃならないのか」と。すぐ別居しました。けれどお米を一ヵ月にほんの僅かくれるだけ、仕方なく毎日お粥ばかり食べていました。お正月の餅つきにも私達を近寄らせず、餅のかけらもくれません。馬小屋のような粗末な小屋でしたが、毎日叩かれるよりはと辛抱しました。

やがて八路軍がやってきました。彼が国民軍だったことが知れて、牢に入れられましたが私は次の子を身ごもっていました。二月二十二日に彼が銃殺されると、先妻の子が明日から自分で働いて生活しろと言ってきました。私は夜昼なく身重な体で働きました。産み月が近づくにつれてあちこち体が痛んで夜も眠れませんでした。夜の明けぬうちから、夜は暗くて人の顔も見分けのつかなくなるまで綿の草取り、肥やしかつぎ、と人間の仕事とは思えない苦難でした。

明るい間ちゅう、外仕事をして、夜は水くみや家の仕事、それでも神様は私を守ってくださり無事に男の子を出産できました。産後二日目からもう掃除洗濯、たきものとりと働かせられました。

やがて全中国が共産党の国になりました。主人が国民軍だったため、反革命、地主というレッテルを貼られて生きていくのは大変なことだったのです。先妻は人民大会に引き出されては、民兵にみんなの前で天井から吊り下げられ、ぶらんこのようにおしまわされ、両手が肩からはずれてしまい、動けなくなって娘に抱えられてトイレに行ったりしていましたが、夜になると余りの痛さに大声で叫ぶばかり。夜明けになって静かになったので、やっと寝ついたのかと思っていたら、娘と二人で、すぐ近くの池に飛び込んで自殺していました。私は幼子を抱え昼も夜も子供の面倒も見てやれぬまま働かされました。連絡事項があると夜中でも大雨の中でも真っ暗な、道さえないような遠方までやらされました。野犬にかまれて、泣き叫んでも誰も助けてはくれませんでした。村の行事にも反革命分子として、参加させてもらえず、後ろ指をさして罵られるばかり、頭の上がるときはありませんでした。

上の人から履歴書を書けと言われ、行ってもいない台湾のことが解らず困りました。何とか嘘をならべて書きましたがその苦しかったこと。地主や反革命の人といるのが嫌で平民の人と再婚しました。大きな湖を作る仕事に行けと言われ、そこのおじいちゃんに子供を預けて行きお正月も帰してもらえませんでした。一日の任務が終わらないときは夜の十二時頃までも労働しなければならず、雪が深く積もり、土を「もっこ」でかついで運ぶとき雪の中に倒れたらそのまま死にたいと思いました。一年くらい働かされ、やっと交替者がきて家に帰られたとき子供と抱き合って泣きました。

（原文のまま掲載）